

平成 22 年 5 月 18 日現在

研究種目：基盤研究（A）
 研究期間：2006 ～ 2009
 課題番号：18202008
 研究課題名（和文） プラハとダブリン –20 世紀文学の総括の試みとしての『二都物語』
 研究課題名（英文） Prague and Dublin—A Summary of the Literary Phenomena of 20th Century Europe as “A Tale of Two Cities”
 研究代表者
 城 眞一（JO SHINICHI）
 東京医科大学・医学部・教授
 研究者番号：60424602

研究成果の概要（和文）：多言語性と多民族性が、プラハとダブリン出身の詩人たち、リルケ、カフカ、イエイツ、ジョイスらの創作の契機となっていたことが論証された。母語の自明性の欠如、あるいは国家・民族・宗教への帰属性の揺らぎ等が、彼らをして、独自の語法と文体を創出させ、既存の帰属性を超えるアイデンティティの探求へと駆り立てたことが確認された。その過程で、「薔薇」と「ユダヤ性」を主題とする英独合同シンポジウムは、欧州文学研究の新局面を切り開いた。

研究成果の概要（英文）：In the course of this investigation, we were able to confirm that the multilingual and multiracial situation in Prague and Dublin, two minor cities in Europe, gave rise to an epoch of the great writers such as Rilke, Kafka, Yeats and Joyce. It was also concluded that the instability of their own mother tongues and the vague senses of belonging to their nations, races and religions, drove them to create their original styles and expressions, and to search for new identities as Pan-European artists. In the process of this study, we, Germanists and Anglicists, organized a symposium on those writers and their characteristics, especially on the symbolism of the rose in the works of Rilke and Yeats and Judaism in the works of Kafka and Joyce, and succeeded in bringing a new light upon the European literary study.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	5,000,000	1,500,000	6,500,000
2007年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
2008年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
2009年度	5,300,000	1,590,000	6,890,000
年度			
総計	18,500,000	5,550,000	24,050,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学＞英米・英語圏文学

キーワード：ナショナリズム、言語危機、神秘思想、リルケ、カフカ、イエイツ、ジョイス

1. 研究開始当初の背景

(1) プラハのゲルマニスト、エドゥアルト・ゴルトシュテユカーは、1965年のリブリツェ

城における「プラハ・ドイツ語文学会議」の席上で、はじめてプラハとダブリンの都市名を挙げて、両都市の文学的生産性とそれらの

比較考察の可能性を指摘した。しかしそれ以来、当研究計画が最初に構想された 2004 年当時いたるまで、内外のドイツ文学研究史上あるいは英文学研究史上において、この問題が組上に載せられた記録は残されていない。すなわち、われわれの研究は、1965 年から 2004 年に至るまでのほぼ 40 年間にわたって放置されていた E. ゴルトシュテッカーによる問題提起を—そこにはじつは冷戦構造とナショナリズムと言語・宗教の壁といった焦眉の問題も投影されていたのだが—、真に研究に値する、優れた提案と受け止め、これを継承するものである。

(2) この間に、プラハとダブリンの都市と文学に関わる研究は、個別にかなりの進展を遂げていた。すなわち、プラハ・ドイツ語文学の研究家ならびにアイルランド文学の研究家たちは、あるいはカフカにおける都市プラハについて、あるいはジョイスにおける都市ダブリンについて、それぞれ政治、言語、宗教に関わる観点から、またはその他の民俗学的見地から、個別に研究を進めていた。例えば河中正彦は、カフカ、リルケをプラハの都市構造と使用言語の観点から、また平野嘉彦は、リルケやカフカはむろんのこと、ツェラーンやマゾッホらをも取り込む広い視野からプラハ・ドイツ語文学に注目していた。加えて三谷研爾は民俗学的視点からカフカのプラハを論じていた。一方のダブリンの側では結城英雄のジョイスに関わる一連の仕事と、日本ジョイス協会の幹部である吉川信、夏目博明、戸田勉らの業績を想起するだけで充分であろう。そして、河中正彦と吉川信がある読書会で同席したとき、おそらくはゴルトシュテッカーの提案が河中によって持ち出されたのであろう。機はずでに熟していた。しかも他でもないこの日本においてである。

(3) 従来の研究との差異は歴然としている。これまでも例えばリルケとイエイツの薔薇のモチーフを扱う研究があったことは事実だが、われわれの研究計画は、このテーマに関しては、総合性と普遍性において他のいずれの研究をも凌駕する抜本的性格を備えていた。また、文学研究の枠を超えて、ヨーロッパ像ないしはこの時代 (20 世紀) についての歴史認識の変更を余儀なくする可能性を孕んでいた。以上が研究開始に至るまでの状況の略述である。

2. 研究の目的

プラハとダブリンという二都市に注目して、20 世紀文学の特質を総括することを目的とする。20 世紀を代表する文学者、カフカ、リルケ、イエイツ、ジョイス、らが、欧州の西端と東端に位置する周縁都市に偏在することは、決して偶然ではない。辺境に生じた、言語をはじめとする諸々の危機的抗争が、世

紀転換期の世代に創造的な活力を与えたがゆえと考えられる。年度ごとに政治、言語、宗教の各側面から、順次、両都市出身の詩人たちを比較考察し、その創作の源泉に光を当てる。最終的には、20 世紀の文学思想の本質を解明する。

3. 研究の方法

(1) プラハ文学を研究するドイツ文学者とダブリン文学を研究する英文学者が可能な限り意見を交換することが、この研究計画ではもっとも基本的な重要事であった。そのためには適切な場所で、時宜を得た研究会を開くことが必須であった。初年度は、双方で、両都市の歴史的・政治的背景、使用言語の変遷、各宗教の人口比の変遷経過、等のデータを集積しつつ、突き合わせることを重ねた。さらに、両研究集団内においても共通の認識を同時に育て、維持するために、共通必読図書を数冊指定した。(よく利用されたのは、独語圏では例えば次の一書である。Jürgen Serke: *Böhmische Dörfer*. Paul Zsolnay, Wien/Hamburg 1987.) これらの、相互の対話を共有する方法と、基本文献を突き合わせる方法は、年度が進み、主題が移行しても変わることはなかった。その際、もっとも注意したことは、一方の側では自明の事柄が、他の側では必ずしも無前提にそうではないこと、とくに英語あるいは独語から邦訳されて外見的には同一の定着した用語であっても、言語圏が変われば、まったく異なる事象を指すこと、などである。(例えば、「言語危機」なる用語、プラハ・ドイツ語の世界では「言葉と事物の乖離」を、ゲール語の世界では「国語存亡の危機」を指す。) こうしたことを不断に予測して、いわば見張りながら対話を重ねる必要があった。さもなければ議論は噛み合わず、結局は、従来のナショナルな研究の枠を一步も超え出ることにはできないと感じられた。

(2) 外国人研究者の招聘と相互交流は、この研究計画の重要な方法であった。研究を開始した直後に、プラハ・ドイツ語文学の生き証人で、戦後英国に住んだ H. G. アードラーの子息、ジェレミー・アードラー (ロンドン・キングスカレッジ教授) を招聘できたことは幸いであった。早い時期にわれわれの提起した問題圏の広さを同教授は教えてくれたからである。以降、第 2 年度目には、ダブリン在住の詩人、ミホール・オシール氏を、第 3 年度目には、グラーツ大学から、ディートマル・ゴルトシュニッグ教授を、最終年度には、ダブリンは UCD (ユニヴァーシティ・カレッジ・ダブリン) から、アン・フォガティ教授を、ベルリンは TU (ベルリン工科大学) から、ハンス・ディーター・ツィンマーマン名誉教授を、それぞれ招聘した。当初の予定を前倒しして、4 年に 5 名を招聘したことによ

て、早期から研究が国際色を帯びて、活性化したといえる。とりわけ最終年度に招聘したフォガティ教授とツインマーマン名誉教授には、それぞれ東京と京都で延べ3回にわたる講演をお願いした。しかも講演前後に毎回、長時間の自由討論会を設定した。これには今回の科研の共同研究者に加えて内外の権威や若手研究者も多数参加したことから、今後、このプロジェクトの主旨が広く浸透して、長期的な波及効果が見込まれる。自由討議のさいの使用言語を英独二カ国語と設定する必要もあって、裏方の苦労も多かったが、招聘計画を最重要の方法として掲げたわれわれの基本方針は、ほぼ実現をみたといえる。

4. 研究成果

(1) 初年度は、全体の展望を確立しつつ、年次課題「ナショナル・アイデンティティ」の側面から文学作品を比較考察した。計3回の研究報告会、外国人研究者の招聘、多数の学会報告、論文、編著書の刊行等によって、プラハとダブリンの、20世紀初頭の政治状況下での詩人たちの内面が解明された。ユダヤ性を含めた種々のナショナル・アイデンティティの喪失と相克と再構築、帰属ないしは離反といった心的ダイナミズムが、この二都市出身の詩人たちの創作の梃子であることが跡付けられた。

(2) 第2年度は、課題「言語危機」のもと、計3回の研究報告会、外国人研究者の招聘、ジョイス協会（国内）主催のシンポジウムにおける研究報告、数篇の論文ないしは編著書等の成果を得た。いわゆる「言語危機」は、本来はマラルメとニーチェに遡ること、二都市出身の詩人に共通する「言語懐疑」からの創造が、隠喩や換喩の独自性を産み（リルケ、イエイツ、カフカ等）、テキストの意味の「重層性」を招いたこと（ジョイス、リルケ、カフカ等）が指摘された。政治と言語の抗争の絶えない二都市に生まれた詩人たちは、とくに言語象徴を先駆的に相対化し、客体化し、志向対象としたが、一方で自明の母語に護られた故郷を失い、言葉と事物への原初的問いからの再出発を余儀なくされていたことが、確認された。

(3) 第3年度は、「神秘思想」を課題として、計3回の研究報告会、外国人研究者の招待講演、英独合同シンポジウムをはじめとする研究報告、10余篇の論文ないしは編著書という多くの成果を挙げた。政治と言語に関わる危機的状況の克服過程において、「神秘思想」ないしは神話的形象が、詩人たちに豊かな発想を供給していたことが、リルケやジョイス等の作品に即して論証された。「薔薇」と「ユダヤ性」を巡る、上記のシンポジウムは、主題の斬新さと横断性により、欧州比較文学研究の新局面を開いたと評価された。

(4) 第4年度は、上述の3年度を総合する年度として、計2回の研究報告会と2名の外国人研究者の招聘講演事業を行った。また研究を総括する口頭発表・論文・著書も他年度に比べ最多を数えた。とりわけ現地研究者の招聘事業の集大成ともいえる2名の研究者の招聘は予想以上の成果を挙げた（「研究の方法(2)」を参照）。その背景には研究分担者（平野嘉彦と結城英雄）による現地研究者との、事前の長期間の綿密な打合せがあり、事実上この段階ですでに深層の交流が始まっていたと考えられる。われわれは二人の招聘教授から多くを学んだが、例えば、両都市における「ナショナリズム」の多様さ、微妙な差異が現前するただ中を生きることの軌轢、それらを乗り越えて獲得された「共生」の素晴らしさ、またその危うさ、などが実体験に基づいて語られたとき、カフカやジョイスの原典が新たに甦るかのようであった。

またこの間に、初年度に掲げられた、二都市をめぐる民族・言語・政治運動の対照図式（ユダヤ人：ヘブライ語：シオニズム＝ケルト人：ゲール語：シン・フェイン党）を凌駕する両都市における複雑なナショナル・アイデンティティの実態が浮き彫りにされていた。すなわち、「ケルト人」を「ゲーリック・アイリッシュ」と捉えるなら、他に「アングロ・アイリッシュ」の概念を導入する必要性が研究分担者によって指摘された。一方のプラハ文学に関しては、ユダヤ系ないしは支配階級のプラハ・ドイツ語文学だけではなく、チェコ語を選んだユダヤ系作家やチェコ・ナショナリズムの担い手たちの文学をも視野に入れる必要性が、とくにツインマーマン教授から指摘された。そして、これらの項目に宗教分布を重ね合わせるならば、両都市間のナショナル・アイデンティティの対応関係は微妙に振れ、ある項目に至ってはそもそも対応項目が不在となることも判明した。

大筋においてはしかし、こうした知見を予測すると同時に方法として取り込みつつ、次のことが解明された、一カフカ、リルケ、ジョイス、イエイツらの両都市出身の詩人たちは、二都市に共通の多民族性と多言語性を文学的出自として、従来のナショナリズムに拘らない新たなアイデンティティを創作によって打ち建てたこと、その際、既存の同一性を解体しつつ再構築する詩的方法が採られたこと、このことによって彼らは20世紀文学の先駆者となったことが明らかとなった。

今後の課題として、プラハとダブリンの両文学における「言語危機」および「神秘思想」に関わる論議を深めて、比較のためのより強固な共通の基盤を設定したい。過去4カ年においても、むろんこれらの主題は2カ年にわたって扱われ、個別の成果も多かったが、全体として議論は初年度の「ナショナル・アイ

デンティティ」を中心に展開したように思われる。次の機会には、軸足を「言語危機」へと移して、フリッツ・マウトナー (Fritz Mauthner)、ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン (Ludwig Wittgenstein)らの作品を考察対象に加えて、20世紀文学の本質にさらに迫りたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 32件)

- ①吉川信、亡霊たちの近代—イギリス・ゴシック小説考(1)、群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編、第59巻、77-87、2010年、査読有
- ②夏目博明、アイリッシュ・アメリカンのステレオタイプ—シャムロック編、青山スタンダード論集、第5号、151-169、2010年、査読有
- ③平野嘉彦、タイポグラフィの近代 — ベンヤミンとゲオルゲ、文学における「モダン」とは何か(2006~2008年度上智大学学内共同研究による研究成果報告書)、38-46、2009年、査読無
- ④平野嘉彦、Die morbide Moderne. Ein Ansatz zur Motivik Benjamin und George, Dogilmunhak (獨逸文學) Koreanische Zeitschrift für Germanistik, Bd.110, Jg.50, H.2, 30-47、2009年、査読有
- ⑤平野嘉彦、ベンヤミンと筆跡学、文学におけるモダン (小泉進・編、上智大学ヨーロッパ研究所研究叢書)、第3巻、125-140、2009年、査読無
- ⑥三谷研爾、展示された文学史 〈プラハのドイツ語文学〉とそのベルリン展(1995)の射程、待兼山論叢、第43巻 (文学篇)、1-20、2009年、査読無
- ⑦結城英雄、『ユリシーズ』を読む—100のQ&A (9)、すばる、8月号、192-209、2009年、査読無
- ⑧結城英雄、ジョイスの時代のダブリン(8)、法政大学文学部紀要、第59巻、1-14、2009年、査読無
- ⑨吉川信、薔薇の外部—初期イエイツの象徴をめぐって、プラハとダブリン — 20世紀ヨーロッパ文学における二つのトポス (城眞一・吉川信・編、日本独文学会研究叢書)、第066巻、2-14、2009年、査読無
- ⑩平野嘉彦、リルケの薔薇、もしくはナショナリズムの不能 — イエイツと照合しつつ、プラハとダブリン — 20世紀ヨーロッパ文学における二つのトポス (城眞一・吉川信・編、日本独文学会研究叢書)、第066巻、15-24、2009年、査読無

- ⑪戸田勉、ジョイスとユダヤ人、プラハとダブリン — 20世紀ヨーロッパ文学における二つのトポス (城眞一・吉川信・編、日本独文学会研究叢書)、第066巻、25-32、2009年、査読無
- ⑫三谷研爾、カフカにおける〈交通〉とアイデンティティ、プラハとダブリン — 20世紀ヨーロッパ文学における二つのトポス (城眞一・吉川信・編、日本独文学会研究叢書)、第066巻、33-45、2009年、査読無
- ⑬結城英雄、W. B. イエイツとジェイムズ・ジョイス—対立と統合—、プラハとダブリン — 20世紀ヨーロッパ文学における二つのトポス (城眞一・吉川信・編、日本独文学会研究叢書)、第066巻、46-60、2009年、査読無
- ⑭城眞一、薔薇と世界—あるいはリルケにおける詩と政治、プラハとダブリン — 20世紀ヨーロッパ文学における二つのトポス (城眞一・吉川信・編、日本独文学会研究叢書)、第066巻、61-74、2009年、査読無
- ⑮金子孝吉、メルヒオール・フィッシャーのダダ小説『ゼクンデ・ドゥルヒ・ヒルン』について、彦根論叢、第376号、33-57、2009年、査読無
- ⑯平野嘉彦、I naturally dislike print and paper ... — 薔薇、もしくはイエイツとリルケ、沖縄外国文学会編 Southern Review. Studies in Foreign Language and Literature, No.23, 1-19、2009年、査読有
- ⑰三谷研爾、不適合のトポグラフィ — カフカ『失踪者』における都市空間と物語 —、日本学術振興会 人文・社会科学振興プロジェクト「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」研究報告書、214-219、2009年、査読無
- ⑱吉川信、イエイツの薔薇 — 詩集 *The Rose* にみる象徴の行方 —、群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編、第58巻、71-81、2009年、査読有
- ⑲夏目博明、アイルランドの外のアイルランド人、青山スタンダード論集、第4号、139-153、2009年、査読有
- ⑳結城英雄、『ユリシーズ』を読む—百のQ&A (8)、すばる、1月号、254-270、2009年、査読無
- ㉑城眞一、リルケにおける詩と政治 (序)、東京医科大学雑誌、第66巻4号、556-559、2008年、査読無
- ㉒Yoshihiko Hirano, Heine-Kraus-Adorno. Eine Konstellation um die „Wunde“ bei Celan im Jahre 1962, Harry ... Heinrich ... Henri ... Heine. Deutscher, Jude, Europäer. Hrsg. v. Dietmar Goltschnigg, Charlotte Grollegg-Edler u. Peter Revers, 327-334、2008年、

査読無

⑳ 平野嘉彦、リルケとトリエステーもしくは地中海、日本ジェイムズ・ジョイス協会編 *Joycean Japan*, No.19, 17-27, 2008年、査読有

㉑ 結城英雄、『ユリシーズ』を読む—百のQ&A (6)、すばる、5月号、282-292、2008年、査読無

㉒ Yoshihiko Hirano、Huchel und Berlin. *Nomina incognita in Celans Gedicht „Ein Blatt“*, *Celan-Jahrbuch (Heidelberg: Universitätsverlag Winter)*, 第9巻、221-232、2007年、査読有

㉓ 三谷研爾、〈交通〉のユートピア ブロート『チェコ人の女中』における移動と越境、東北ドイツ文学、第50号、101-119、2007年、査読有

㉔ 平野嘉彦、Auschwitz – Berlin – Ukraine. *Einige Kapitelanfänge zu einem kommenden Celan-Buch: „Toponym als U-topie“*, 東京大学大学院・ドイツ語ドイツ文学研究会『詩・言語』、第66号、11-21、2007年、査読有

㉕ 結城英雄、ジョイスの時代のダブリン (3)、法政大学文学部紀要、第54巻、41-53、2007年、査読無

㉖ 河中正彦、リルケとカフカーリルケの『始原の音』とカフカの『ヨゼフィーネ』、山口大学 独仏文学、第28号、109-122、2006年、査読無

㉗ 平野嘉彦、『屋根裏の散歩者』から『猫町』へ—『群衆と観相学／群衆の観相学』の序にかえて、日本独文学会『ドイツ文学』、第130号、1-14、2006年、査読有

㉘ 平野嘉彦、Malte – Menge – Masse. *Notizen zu Intérieur, Gesicht und Zahl*, 日本独文学会『ドイツ文学』、第130号、67-81、2006年、査読有

㉙ 結城英雄、ジョイスの時代のダブリン (2)、法政大学文学部紀要、第53巻、43-55、2006年、査読無

〔学会発表〕(計 16件)

① 吉川信、亡霊たちのアイルランド—ゴシックの系譜、中央英米文学会、2009年12月26日、成城大学 32A教室

② Yoshihiko Hirano、*Mit des Windes Säuseln überrascht. Eine poetologische Skizze zur „Zeit“ in Japan und in Deutschland*, *Internationales Humboldt-Kolleg „Phänomen Zeit. Dimensionen und Strukturen in Kultur und Wissenschaft“*, 2009年11月12日、Meerschenschloß der Universität Graz

③ Yoshihiko Hirano、*Zwischen Hölderlin*

und Chagall. *Einige philologische Notizen zur Celan-Lektüre, Internationales Symposion „Paul Celan und der europäische Kulturraum“*. Universität Bukarest / Gesellschaft der Germanisten Rumäniens, 2009年9月26日、Hotel Radisson SAS Bukarest

④ 平野嘉彦、リルケの薔薇、もしくはナショナリズムの不能— イェイツと照合しつつ、日本独文学会 秋季研究発表会 シンポジウム「プラハとダブリン—20世紀ヨーロッパ文学における二つのトポス」、2008年10月13日、岡山大学

⑤ 三谷研爾、カフカにおける〈交通〉とアイデンティティ、日本独文学会 秋季研究発表会 シンポジウム「プラハとダブリン—20世紀ヨーロッパ文学における二つのトポス」、2008年10月13日、岡山大学

⑥ 吉川信、イェイツの薔薇—もしくは薔薇の外部、日本独文学会 秋季研究発表会 シンポジウム「プラハとダブリン—20世紀ヨーロッパ文学における二つのトポス」、2008年10月13日、岡山大学

⑦ 戸田勉、プラハとダブリン—ジョイスとユダヤ人、日本独文学会 秋季研究発表会 シンポジウム「プラハとダブリン—20世紀ヨーロッパ文学における二つのトポス」、2008年10月13日、岡山大学

⑧ Yoshihiko Hirano、*Die morbide Moderne. Ein Ansatz zur Motivik Benjamin und George*, 韓国独文学会ソラク・シンポジウム *Jahrhundertwende – Der Aufbruch in die Moderne*, 2008年10月2日、慶州・コーロンホテル

⑨ 平野嘉彦、*I naturally dislike print and paper ...* — 薔薇、もしくはイェイツとリルケ、沖縄外国文学会第23回大会、2008年7月6日、沖縄国際大学

⑩ 平野嘉彦、ベンヤミンと筆跡学、上智大学ヨーロッパ研究所、2008年3月16日、上智大学図書館

⑪ 平野嘉彦、ボヘミアの〈儀式殺人〉、関西チェコ／スロバキア協会、2008年3月8日、兵庫トヨタ本社ビル

⑫ 平野嘉彦、リルケとトリエステーもしくは地中海、日本ジェイムズ・ジョイス協会、2007年6月16日、青山学院大学

⑬ 吉川信、都市と年—Dublin - Trieste - Zurich - Paris、日本ジェイムズ・ジョイス協会、2007年6月16日、青山学院大学

⑭ 戸田勉、ジョイスと都市—都市のユダヤ人、日本ジェイムズ・ジョイス協会、2007年6月16日、青山学院大学

⑮ 平野嘉彦、タイポグラフィの「近代」— ベンヤミンとゲオルゲ、上智大学ヨーロッパ研

究所、2007年5月30日、上智大学文学部
⑩河中正彦、プラハとダブリンあるいはカフ
カとジョイス、関西チェコ／スロバキア協会、
2006年11月25日、兵庫トヨタ本社ビル

〔図書〕(計14件)

- ①平野嘉彦、岩波書店、死のミメーシスー
ベンヤミンとゲオルゲ・クライス、2010年、
362
- ②三谷研爾、三元社、世紀転換期のプラハ
ーモダン都市の空間と文学的表象、2010年、
336
- ③城眞一・吉川信(編著)、日本独文学会(発
行元)、プラハとダブリン—20世紀ヨーロッ
パ文学における二つのトポス—(日本独文
学会研究叢書066)、2009年、76
- ④Jeremy D. Adler (Hrsg.)、Fischer-
Taschenbuch-Verl.(Frankfurt a. M.)、Elias
Canetti: Aufzeichnungen für Marie-Luise.
Aus dem Nachlaß. 2009. 119S.
- ⑤Dietmar Goltschnigg、Lit Verlag
(Münster)、“Fröhliche Apokalypse“ und
nostalgische Utopie. Österreich als
besonders deutlicher Fall der modernen
Welt. 2009. 366S.
- ⑥Anne Fogarty (coedited with Morris
Beja)、Univ. Pr. of Florida、Bloomsday 100、
Essays on Ulysses. 2009. 366P.
- ⑦Hans Dieter Zimmermann、C.H. Beck
(München)、Die Deutschen und ihre
Nachbarn: Tschechien. Hrsg. v. Helmut
Schmidt und Richard von Weizsaecker、
2009. 192S.
- ⑧平野嘉彦(編・訳)・柴田翔(訳)・浅井
健二郎(訳)・筑摩書房、カフカ・セレクシ
ョン I [時空／認知]、II [運動／拘束]、III
[異形／寓意]、2008年、343・315・329
- ⑨Yoshihiko Hirano(共編・共著)、
Königshausen & Neumann (Würzburg)、
Kulturfaktor Schmerz. Internationales
Kolloquium in Tokyo 2005、2008年、250、
所収論文：“PAIN HAS AN ELEMENT
OF BLANK.” Der Diskurs des Schmerzes
bei Dickinson, Rilke, Hölderlin und Celan
(207-217)
- ⑩Micheal O’Siadhail、Bloodaxe Books
Tarset、Globe、2007. 128P.
- ⑪三谷研爾(責任編集)、大阪大学出版会、
ドイツ文化史への招待 芸術と社会のあい
だ、2007年、291、所収論文：“存在と帰属”
カフカ三代の歴史から(181-199)
- ⑫吉川信(共著)、未来社、歴史の悲歌が聞
こえる、2007年、219、所収論文：ジョイス
はデ・ヴァレラの夢を見たか(103-129)
- ⑬平野嘉彦、みすず書房、ホフマンと乱歩ー
人形と光学器械のエロス、2007年、132
- ⑭吉川信(共著)、言叢社、死と来世の神話

学、2007年、350、所収論文：オシリス神の
活用—ジョイスとロレンスの復活神話
(25-41)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

城 眞一 (JO SHINICHI)

東京医科大学・医学部・教授

研究者番号：60424602

(2) 研究分担者

平野 嘉彦 (HIRANO YOSHIHIKO)

東京大学・名誉教授

研究者番号：50079109

吉川 信 (KIKKAWA SHIN)

群馬大学・教育学部・教授

研究者番号：70243615

戸田 勉 (TODA TSUTOMU)

山梨英和大学・人間文化学部・教授

研究者番号：90217505

夏目 博明 (NATSUME HIROAKI)

青山学院大学・法学部・教授

研究者番号：60172574

結城 英雄 (YUKI HIDEO)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：70210581

(3) 連携研究者

金子 元臣 (KANEKO MOTOOMI)

大阪大学・大学院言語文化研究科・教授

研究者番号：10081605

三谷 研爾 (MITANI KENJI)

大阪大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：80200046

春山 清純 (HARUYAMA KIYOZUMI)

神戸薬科大学・薬学部・教授

研究者番号：10299084

金子 孝吉 (KANEKO TAKAYOSHI)

滋賀大学・経済学部・教授

研究者番号：00185927

研究協力者

ジェレミー・アードラー (JEREMY D. ADLER)

ロンドン王立大学・教授

ミホール・オシール (MICHEAL O’ SIADHAIL)

ダブリン在住・詩人

ディートマル・ゴルトシュニグ (DIETMAR
GOLTSCHNIGG)

グラーツ大学・教授

アン・フォガティ (ANNE FOGARTY)

ユニヴァーシティ・カレッジ・ダブリン
(UCD)・教授

ハンス・ディーター・ツィンマーマン (HANS
DIETER ZIMMERMANN)

ベルリン工科大学・名誉教授

竹腰 祐子 (TAKEKOSHI YUKO)

東京医科歯科大学非常勤講師